

夏の経済教室(大阪中学対象)記録

1 日時 8月13日(火) 9時30分～16時00分

2 場所 大阪取引所4階OSEホール

3 参加人数 申し込み70名(満枠) 対面実参加者 66名(関係者含)

4 主な内容: 進行役李洪俊先生(大阪市立矢田南中)

(1) 主催者挨拶 経済教育ネットワーク代表篠原総一先生(同志社大学名誉教授)、鈴木深氏(東京証券取引所)より挨拶があった。

(2) 1コマ目 「JPXの最新の動きと金融経済教育の取組み」

鈴木深氏(東証金融リテラシーサポート部課長)より、以下の報告があった。

- ① JPXの最新の動きとして、取引時間の延伸、市場区分の見直し後のフォローアップなど。
- ② 金融経済教育の取組みについて、これまで日本証券業協会及び東京証券取引所等にて提供されてきたミスターX、金融クエスト、株式学習ゲームなどの教材は、新たに設立された金融経済教育推進機構より提供されることになった。
- ③ 大学入試問題から、投資部門別株式保有比率、上場会社時価総額ランキングなどについての説明がされた。
- ④ 最新の株式市場の動き、東証業種別年間騰落率についての説明があった。
- ⑤ 「18歳からはじめるNISA」という体験型の新教材の概要説明があり、会場の先生方を対象にした簡単なデモンストレーションが行われた。また、この新教材について、山本雅康先生(奈良学園中学校高等学校)から、実践報告があった。
- ⑥ 以下の質疑、及び情報提供が行われた。

Q: 新教材のオーダーなど、どのくらい前にすれば良いか。

⇒出前授業ならば2、3か月前に。特に2学期後半は混み合うので要注意。本日提案の新教材自体の提供のみならば、随時OK。

野間先生(同志社大学教授)より、個人金融資産統計の変化、特に株式などが大きく増えたとの情報提供があった。

(別添の東証鈴木氏の報告資料を参照)

(3) 2コマ目 テーマ「経済の視点で地理の授業を創る」

まず、行壽浩司(福井県美浜町立美浜中)先生から、以下の提案があった。

- ・経済学習は生徒も教員もみんな「苦手」かもしれない現状をふまえ、具体的な授業ネタから経済学習を組み立てる。しかし「おもしろい授業」だけではダメであり、「面白くてよく分かる授業」を目指したい。
- ・このことをふまえ、「なぜキャベツを廃棄しているのか?」と生徒に発問すると、「虫に食われた」、「腐った」などの回答があった。そこで、なぜ豊作でキャベツを廃棄したのかについて、教科書の写真を見て考えさせ

るなど、生徒にとって意外な事実を活用した。

- ・キャベツ詰め放題千円のネタは、地理的要因から経済を考えると、環境決定論ではなく、環境可能論から教材を捉え直す例とした。「コスト」の視点で、従来までの地理的授業の再構成をおこなった。
- ・環境可能論のネタとして、フィールドワークをして取材した山奥のさくらんぼ狩りの事例や「雪ばなな」、ブルーベリーの日本一の産地はどこかというクイズの例が紹介された。
- ・また、学習指導要領の「地理的見方・考え方」を働かせる。例えば、位置や分布を活用するのがプランA。プランBは地理や公民など枠組みではなく、地理の視点から経済につなげるというような複数のプランをかんがえたらどうかという提案をされた。

(別添の[行壽先生の報告資料](#)を参照)

行壽先生のご発表に対し、河原和之先生(立命館大学非常勤講師)から以下のコメントがあった。

- ・「おもしろい授業」だけではダメと考え、行壽先生はこの点を乗り越えるために、環境可能論から意外な事実、葛藤、対立する学習内容を提示している。ただし地理の学習では、環境による影響が大きい。
- ・「環境決定論」から「環境可能論」へ、自然と共存しつつ制約を乗り越える人間。例えば、さくらんぼ狩りを深めるのは第6次産業の事例、地域活性化にもつながりがある。
- ・地理的分野で必要なことは、地理学5大テーマを押さえること。熊本平野と八代平野は、隣にありながら形成が異なる。熊本平野は養分を含む阿蘇山から流れる河川により、八代平野は急流である球磨川により形成される。人間はその「場所」(水、気候、土地)の制約を乗り越え人間と自然環境との相互依存関係を築いている。
- ・地理の授業では「地理的見方・考え方」を育て、「地理的諸課題」を解決する資質・能力を育成する役割がある。そのためには、地理的思考では分析できない事象もあるので、「都市への人口集中」など経済的見方・考え方からの考察も取り入れたいと説明された。

(別添の[河原先生の報告資料](#)を参照)

以下の情報提供と質疑があった。

- ・兼間先生(札幌大学非常勤講師)より、釧路バナナは倒産したと情報提供があった。
- ・進行役の李先生から

Q：二人の先生がネタを探すコツは？

⇒行壽先生からはフェイスブック、Twitter をフォローし、キャッチーなネタを得て、ウラを取りながら活用している。

⇒河原先生からは、学校からはなるべく早く帰り、喫茶店で新書や新聞を読んでネタを考えた。現地取材する。ネットは資料の確認だけである。授業で雑談はあまりしない。落としどころのあるネタが不可欠である。との回答があった。

(4) 3コマ目 テーマ「経済の視点で歴史の授業を創る」

佐藤央隆先生(名古屋市立南陽中教諭)から以下の報告があった。

- ・経済の視点に着目した日本貿易史の授業創り提案である。なぜ経済の視点で歴史を学ぶ意義があるのか。歴史は、人間がどのような行動をとるのかを探るヒントの宝庫である。
- ・経済の視点に着目した日本貿易史に関する学習内容の例として、対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性、機会費用、トレード・オフ、インセンティブを挙げ、17の教科書に登場する交易・貿易に関する事例を、それらの概念で整地した資料を提示された。
- ・経済の視点を生かした一つ目の実践では、「鎖国」体制の始まりに関する資料を活用した学習活動の例を挙げた。生徒の実態に応じてクイズは二択とした。以下2点の活動をふまえ、
 - 活動①ポルトガルとオランダに関する出来事を年表にまとめる。
 - 活動②オランダとの貿易における主な輸出入品を資料から読み取り、使途を考える。
輸出品の金銀比価の差益獲得に気づかせた。
- ・二つ目の実践では、「鎖国」体制の終わりに関する資料を活用した学習活動の例を挙げた。生徒の実態に応じてクイズは二択とした。以下3点の活動をふまえ、
 - 活動①イギリスとアメリカに関する出来事を年表にまとめる。
 - 活動②日米修好通商条約第4条の条文から日本がアメリカと条約を結んだ理由を考える。
 - 活動③日米修好通商条約における「不平等」の内容、問題点や関係する出来事についてまとめる。
関税自主権の欠如の功罪に気づかせた。
- ・最後に授業創り・改善に重要な視点とは何かについて、歴史的分野の学習指導における佐藤先生ご自身の課題を4点に整理して発表を閉じた。

(別添の[佐藤先生の報告資料参照](#))

佐藤先生ご提案に対し、横山和輝先生(名古屋市立大学教授)から以下のようなコメントがあった。

- ・経済学がこの数十年で大きく変わった。昨今の経済学の考え方は教室でも役に立つ。例えば、「取引のあり方や値段の決め方を切り口として、人間がどのような行動を取るのか」を考えさせることである。
- ・これまでの「机上の空論」に近かった理論から、今や、観察重視、データを学者間で共有しあう時代となった。しかし、データ重視といっても因果関係を把握する難しさがある。まして史料となれば、本当に事実が書かれてるのかも簡単には判断しがたいものである。・その例として、生糸輸出総量に占める日本のシェアデータをもとに、変化の背景に注目すること、資料をもとに議論することの大事さを指摘された。
- ・経済で鍵になるのは、個人、ときには組織集団の意思決定である。歴史は、ただでさえ信ぴょう性が完全とは言えない史料を通じてしか、その意思決定を判断せざるを得ない。したがって、昔の方が、経済の構造が簡単などとは、口が裂けても言えない。
- ・授業にとって教科書は、出発点であり、着地点でもある。だからこそ、歴史上の様々な場面での当事者意識と生徒たちの当事者意識との距離が縮まるよう、「先生も一緒に考えてみるね」の態度が授業づくりには必要。

・授業づくりの資料探しとして国公立国会図書館デジタルアーカイブを挙げられた。

<https://dl.ndl.go.jp/>

(別添の横山先生の報告資料参照)

質疑なし。

(5) 4コマ目 テーマ「新しい経済単元の授業提案」

梶谷真弘先生(茨木市立西中教諭)から以下の報告があった。

- ・まずこれまでの「夏休みの経済教室」での先生の二回のご発表をふりかえった。
- ・梶谷先生の問題意識として、経済の視点を活用すること。オーセンティックな社会科の活用をこころがけた教材や授業づくりを目指していることが表明された。
- ・その課題を乗り越えるための事例が全二回で発表した経済の視点を取り入れた歴史学習である。
- ・以上をふまえ「公民分野」の経済の単元構成を作成した。

この単元構成のポイントは身近な題材が前提として生徒の素朴な疑問を活用し、判断、意思決定を求め、かつ教科書の系統性も確保するものとなっている点である。

単元構成として、経済の導入、私たちの生活と経済、消費者と経済、企業と経済、これからの日本経済、財政とこれらのパフォーマンス課題を示し提案を終えた。

(別添の梶谷先生の報告資料参照)

梶谷先生のご発表を受けて橋本康弘先生(福井大学学術研究院教育・人文社会系部門教授)からのコメントがあった。

- ・梶谷先生の問題意識はオーセンティックな社会科を作りたいというものである。梶谷先生は見方・考え方を活用し「経済的意思決定能力」を育成し、パフォーマンス課題を駆使し、生徒の「やる気スイッチ」を引き出そうとしている。
- ・次の学習指導要領はどう改訂されるか。ますます「探究」が重視されるだろう。「習得」「活用」「探究」の学力観から、「探究」の学力観へ大きく転換することになると思われる。「探究」が重視される背景には、非認知能力の育成がある。また、「対話型」「協働型」の授業がより一層重視される中で) PDCA 型の授業づくりが期待されている。
- ・「探究」型の科目は既に高等学校中心に設定されている。「探究」を進めつつ知識の習得、活用をも進めることが目指されている。

(別添の橋本先生の報告資料参照)

これらのまとめを踏まえて、橋本先生から梶谷先生への質問があった。

(生徒の学習意欲を高める授業づくりが一層重視される状況の中で) 梶谷実践の授業を生徒はどう受け止めているか? (対話型「協働型」の授業が重視される状況の中で) 「生徒どうしのやりとり」はどうなっているか?

梶谷先生からは、生徒どうしのやりとりに関しては、さまざま支援を、生徒 1 人ひとりを見ておこなっているが、まだまだ課題ありであるとの回答があった。

橋本先生からの単元計画はどうなっているかに対して、梶谷先生からは、単元計画が骨組みであり、どこまで学習にむかうか。まず一斉で、この後個人または班で取り組ませるとの回答があった。

・最後に、橋本先生から、「探究」学習は子どもが問いを立てて、問い続けることができることが問われる。梶谷先生の課題はどこまで生徒が問いを生み出すか。問いから答えまで学び続けることができるか、であるとまとめられた。

報告に対する以下の質疑があった。

Q：「探究」で毎時間進めている。探究ではどこまで生徒に任せるのが良いのか。加えて学力テストで学力を上げろとする圧力がある。どこまでが探究をおこなうべきか？

⇒梶谷先生から、どう「探究」するか。これは課題と資料による。学びが意図したところになれば、それなりの課題が出てくる。見方・考え方を含んだパフォーマンス課題や生徒が問いを獲得する学習内容が必要であり、目の前にいる生徒次第である。

Q：意思決定の授業が大事なのはわかるが、評価などはどうしたらよいか？

⇒梶谷先生から、単元の最初に出す多面的・多角的な観点で評価している。議論型の授業になれていない目の前にいる生徒の学力を上げていくためには、多面的・多角的な資料を出すなど工夫が必要と感じている、との回答があった。

(6) 新井明先生（経済教育ネットワーク理事）からまとめと最後の挨拶があった

今日の一番の収穫か。当事者意識が大事であること。生徒のやる気スイッチを引き出すこと。このためには私たち、教員自身が当事者意識を持つこと、足元を見直すことが大切であることを学んだ 1 日でもあったと語り、挨拶を終えた。

以上、記録：杉田孝之（千葉県立津田沼高等学校教諭）